低侵襲で繊細な歯周外科手技を可能にする KAIエステティックナイフの臨床

医療法人マイアベニューなみき通り歯科矯正歯科
（愛知県名古屋市）
院長　**安藤 壮吾**

近年、歯周形成外科や再生療法においては、侵襲を最小限に抑えながらも高い精度と審美性を求められる治療が増加している。とくにマイクロサージェリーの重要性が再認識される中で、「**KAIエステティックナイフ**」は、筆者の臨床において非常に有用なツールとなっている。

KAIエステティックナイフの特徴と応用

KAIエステティックナイフは、極めて細い刃（1.5mm幅）を持つ歯周外科用マイクロナイフで、把持性の高いハンドルと組み合わさっており、術者の意図した切開線を描くことが可能である。

とくに歯肉の薄い部位や限られたスペースでの操作において、ナイフの湾曲形状が有利に働き、柔らかいタッチでも組織へのトラウマを最小限にとどめることで、術後の治癒経過にも良好な影響が期待され、歯間乳頭部や歯頚部の精密な剥離操作が可能となる。

結合組織移植術（CTG）における採取部位（口蓋）での使用や、リセッション治療におけるレシピエント部位のスプリット層剥離には、**薄刃かつ刃背との段差がないデザインが有効であり、粘膜の損傷や過剰剥離を防ぐことができる**。これにより、術後の疼痛や治癒遅延のリスクを軽減し、患者の満足度も高い。

さらに、**ブレードの形状に工夫があるため、手指の微細な動きを伝えやすく、術者が感じる操作負荷も少ない**という点は、とくに若手や女性歯科医師にとっても恩恵が大きい。

またKAIエステティックナイフは、いずれもディスポーザブル仕様で、毎回新品を使用することで感染リスクを軽減しつつ、常に高い切れ味を維持できる。今後、歯周再生療法や粘膜移植術の応用がさらに広がる中で、術式に応じたナイフの選択そのものが、治療成否の鍵となる時代が到来している。従来の「とりあえずユニバーサル」から、「症例に応じたブレードとハンドルの選定」へと発想を転換することが、歯周治療の質的向上につながる。

KAIエステティックナイフは、こうした潮流のなかで、“**器具が治療精度を底上げする**”という発想を具現化した存在であり、今後の外科トレーニングや教育現場でも重要な教材となっていくだろう。

図①
繊細な切開が求められる下顎前歯部へのアプローチ。先端幅1.5㎜の極細ブレードにより、術者の意図に沿った精密な切開線が可能

図②
口蓋部における結合組織採取時に段差のないブレードデザインで、薄い結合組織も精密に採取することが可能

図③
臨床上も問題はなく、患者も非常に満足している

マイクロナイフ KAI エステティックナイフ